



今号の表紙
中村恭子 筆
《百刻みの刑—ドゥルーズの時間の第三の総合》
紙本彩色 三枚組絵 各180×90cm（縦×横）、2010年

作者のことは

本作品では、バタイユやドゥルーズに準拠して、ラン科植物ハナバチラン属と雄バチの偽似交授を題材に描いている。私の研究テーマは、一貫して「生命とはなにか」である。この問いについて、精神あるいは肉体の「集合と離散」というタイプ・トークンの両義構造を構想し、そのモデルとしての絵画制作を実践してきた。タイプ・トークンとは、ある集合とそれを構成する個物という両義的な視点である。例えば、一個（の生命体）と見えている砂山は、一個（の生命体）の砂粒で構成された一個の全体だ。生命は、そうした全体性という観念、強度と、現実化された個物、具象の両義性においてこそ存在し、この両者をつなぐ記号化作用において、その姿を顕現すると考えられる。ランに飛来する雄バチでは、「雌」を選択する際、形態一個を選びながら、同時に集合、タイプを選ぶ。匂いや光沢、毛並みなど、記号的な雌バチの要素があれば、花であれ人工模型であれ、見境無く飛来する。一方、花はそうした個々の記号を実装している。それらが、本来繋がるはずの無い個物としての砂粒を接合して、砂山に組み合わせてしまう。ハチは、環境と変異との予定調和的關係を前提としない「ずれ」・ある精神の「瓦解」、誤解を持ちながら、厳密な雌の形状（雌バチ）から離れた形（花）をも許容することになる。この時、ランとハチは両者で「一個の生命体」と「一個の全体」の両義性を、トポロジカルに体现している。

このように、各個体の生命体としての近傍（「私」という砂山）がつぶされ、部分に分散されていると同時に、繋がっているからこそ「ハナバチ」を形成することができるし、新たに展開して行けるのだろう。生命の諸瞬間・諸事例は、そうしたある種の構成、ある種の配備によって生成できるのではないか。そこで、個物と全体性といった異なる階層性を持ちながら、その区別を鑑賞者に混同させ、区別を無効にする作用を、制作の中に意識的に構想し試みた。本作品は、ランと昆虫のバラバラな各個（断片）が粘液で繋がって、一個の生物（全体）に再配置されるランと雄バチの、集合と離散の、相互作用の表象である。個別の偏執的・多形倒錯的な欲望を前にして肉体が分散し、部分を交換することで新たな全体を構成し、精神を集合していく。そのような情念の経済活動として、生命の全体像を見出した。

私はこの意味やイメージを、バタイユが示した「百刻みの刑」に強く見出ししている。受刑者に阿片を投与し、意識が混濁している中で、肉体を百塊の肉片に切り刻むという、中国の清の時代まで行われた処刑法である。しかし、怖ろしい処刑のはてに、まるで快楽の極致の表情を浮かべながら身体を失っている受刑者の様子には、即自の錯覚が告発されるであろう点において、未だ自我以外の間人像や価値観を持つに至っていない人間への問題提起があるように思う。タイトルにも引用したドゥルーズの時間の第三の総合は、そうした自己・自我の分断と接合の共立した百刻みの刑としての予期（能動的な運動）と言える。本作品は、そこで「過去という即自と想起における反復＝記憶それ自身のエロスのな効果」と語られた意味で、ランとハチの時間を空間的に繋ぎ合わせた動的接合の、絵画による実践なのだ。

中村恭子
アーティスト
2010年 東京藝術大学大学院 美術研究科美術専攻日本画研究領域修了、博士（美術）
2010年より、早稲田大学博士研究員（metaPhorest）
http://www7b.biglobe.ne.jp/~fuji_kaika/

編集後記

■秋らしい日々となりました。皆様には、ご活躍のことと拝察いたします。17巻2号をお届けいたします。例年通り、学術大会予稿集を兼ねております。今号には、気鋭の先生方に総説2件を御寄稿頂きました。大変読み応えのある力作で、執筆者の方々に感謝いたします。

■さて、今年2011年はBünningの概日時計による光周期的日長測定モデル提唱75周年、Konopka & Benzerによるショウジョウバエの*period*遺伝子座発見40周年、Grobbelaar、Huangらによる原核生物（シアノバクテリア）における概日リズム発見25周年などに当たります。先人の偉業をとくに振り返りつつ、学術大会でさらに新たな展開に繋がる驚きに出会えることを楽しみにしています。

■前号から、著者への別刷配布を辞め、巻頭言・総説・ノート・学会参加記などに関してpdfファイルを学会のホームページに掲載し、広くオンライン公開することになりました。これにより、より多くの方々に、会員の皆様のご活躍の様子、学会や学会誌を周知していただけたと思います。会員の皆様には、引き続き学会誌へのご協力、御寄稿を賜りますよう、よろしく願い申し上げます。また、今号より、毎年第2号（秋号）のページ番号を、1号（春号）からの通し番号とさせていただきます。

■今号の表紙は、生物学（とくにラン科植物学）のみならず、文学、現代思想、美術史などを分野横断的に踏まえながら、「生命とは何か」を巡って旺盛な研究・制作活動を展開している気鋭の現代美術家、中村恭子さんをお願いしました。強度に思弁的かつ詩的でもある、鮮烈な表現をお楽しみください。なお、タイトルになっている「第三の時間の総合」は、フランス現代思想の泰斗、ジル・ドゥルーズが、主著『差異と反復』の中で、時間、自己そして生の複雑な関係性を論じる際のキーワードとして提案された哲学的な概念です。「時間とは何か、生命とは何か」を、より広い意味で考えるならば、こうした哲学や文学における議論、芸術の表現と、生物学が扱っている「時間・生命」を巡る議論にどのような繋がりがあるのかを、本当はきちんと考えなければいけないのではないかと改めて感じさせられています。

時間生物学 Vol. 17, No. 2 (2011) 平成23年11月30日発行

発行：日本時間生物学会 (<http://wwwsoc.nii.ac.jp/jsc/index.html>)
(事務局) 〒464-8601 名古屋市千種区不老町
名古屋大学大学院 生命農学研究科
応用分子生命科学専攻 海老原史樹文研究室内
Tel：052-789-4066
(編集局) 〒162-8480 東京都新宿区若松町2-2
早稲田大学先端生命医科学研究センター
(TWIns) 1F 岩崎秀雄研究室内
Tel：03-5369-7317 Email：hideo-iwasaki@waseda.jp
(印刷所) 名古屋大学消費生活協同組合 印刷・情報サービス部